

チャールズ・キクチの日記に見る「忠誠登録」と 戦時中の日系アメリカ人の再定住

“Loyalty Registration” and Japanese Americans’ Resettlement during World War II
in Charles Kikuchi’s Diary

増田 直子
Naoko MASUDA

はじめに

日本の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が引き起こされると、その約2か月後の1942年2月19日にフランクリン・ローズヴェルト大統領は大統領行政命令第9066号に署名した。これを受けて1942年3月に軍はカリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州全域およびアリゾナ州の南半分を軍事指定地域とし、そこに住む12万人弱の日本人移民及びアメリカ生まれの彼らの子孫（両者を合わせて以下日系人とする）を強制的に立ち退かせた。彼らの多くは「仮収容所」に収容され、その後全米10か所に作られた収容所に収容された¹。

しかし、立ち退きが始まってから約4か月後、まだ仮収容所から収容所への移転が完了していない1942年7月に収容所を管理していた「戦時転住局(War Relocation Authority、以下WRA)」は軍事指定地域外への再定住政策を発表した。立ち退きが始まった早い段階から再定住の計画が練られたのには、いくつかの理由が考えられる。第一に、第2次世界大戦が国民を総動員しての総力戦であったため、「軍事的必要性」を理由に西海岸から強制退去させた日系人たちを税金を使って長期間収容所に入れておくわけにはいかなかった。更には労働力不足のため、日系人を労働力として、そして後には兵士として動員する必要があった。また、枢軸国側との宣伝戦において、日系人の強制収容はアメリカ政府が標榜した「4つの自由」に矛盾するとして攻撃される口実となり得た。民主主義、自由、人種の平等といった理念の下にアメリカ国民を一丸とやらせて動員するためにも、日系人を再びアメリカ社会の一員として再定住させる必要があった²。

再定住計画は1942年からWRAの主要な仕事の1つとなっていたが、同年7月から12月の間に収容所から無期出所したのは866人と少数だった³。そのような中で、1943年1月に陸軍が日系アメリカ人部隊編成を発表し、2月に二世男子に対して「忠誠登録」を行った。WRAは出所許可を判断するための必要な情報を得ようとして、「忠誠登録」の質問を一部変更して、17歳以上のすべての収容者に「戦時転住局出所許可申請書」という質問票を配布した。

“Loyalty Registration” and Japanese Americans’ Resettlement during World War II in Charles Kikuchi’s Diary
Naoko Masuda

先行研究において「忠誠登録」は二世戦闘部隊編成のために行われたことから、二世の徴兵問題や収容された状態で日系人のアイデンティティを問われることへの不満として捉えられてきた。ミチコ・ウェグリン(Michi Weglyn)は「忠誠登録」は当局の意図していなかった混乱を収容所に引き起こし、収容者たちの怒りと不審を招いたとしている⁴。また、「忠誠者」と「不忠誠者」を分けて管理するためにWRAが17歳以上の収容者全員に質問票を配布したことから、「不忠誠者」のトゥールレイク収容所(カリフォルニア州)への隔離やそこでの市民権放棄につながった。強制立ち退きや収容によるアメリカ人としての権利の剥奪や希望の喪失が市民権放棄や日本への送還の大きな要因であるとトーマス(Dorothy S. Thomas)とニシモト(Richard Nishimoto)は指摘している⁵。実際のところ、市民としての権利意識の強かった人々が市民権の侵害に対する抗議の意思表示として回答したり、脅しや圧力があつたりしたこと、「忠誠登録」にアメリカへの忠誠心とは別の基準で回答した収容者がいた⁶。このようにWRAや軍は「忠誠登録」や「戦時転住局出所許可申請書」を収容者の分類に利用したが、収容者たちは必ずしも「忠誠」か「不忠誠」かという基準で答えたわけではなかった。

収容者たちの回答を出所許可の判断基準として使うことをWRAは意図していたが、質問の解釈や再定住への考えについて両者の間に大きな隔たりがあつた。このような状況下でチャールズ・キクチ(Charles Kikuchi)は収容所の管理者であるWRAと収容者たちを研究者として、そして自身も収容された当事者として間近に観察していた。

キクチは1916年カリフォルニア州ヴァレホで8人兄弟の長男に生まれたが、父親から虐待を受け、兄弟の中で1人だけ孤児院に入れられた⁷。その後家族の元に戻るが、子ども時代の経験から一世や日本に対して彼は複雑な気持ちを抱いていた。

キクチはカリフォルニア大学バークレー校の社会学者ドロシー・トーマスの研究プロジェクト「日系アメリカ人立ち退き再定住計画」(Japanese American Evacuation and Resettlement Project 以下JERS)に参加し、自身も家族とともに収容されたタンフォラン仮収容所(カリフォルニア州)、ヒラ・リバー収容所(アリゾナ州)でフィールド・ワークを行った。1943年4月に収容所からシカゴに再定住してからもフィールド・ワークを続け、日系人にインタビューを行った⁸。トーマスの勧めで、キクチは真珠湾攻撃の日から1988年に亡くなるまで詳細な日記を残しており、立ち退きやタンフォラン仮収容所での生活を綴った1941年12月7日から1942年8月31日までの日記は*The Kikuchi Diary*として出版されている⁹。それ以降の出版されていない日記においてもキクチはJERSのためのインタビューの内容や手紙のやりとり、収容所内のキクチ自身やその家族を含む日系人の生活、日系人の再定住などについての観察や考えを詳細に記している。「忠誠登録」が行われたヒラ・リバー収容所内の様子についてもキクチは、当事者および研究者の両方の立場から日記に記している。日記をつけることはキクチにとって収容という経験や周囲からの圧力に対処し、研究方法の問題を処理する手助けとなった¹⁰。

本稿は、「忠誠登録」を通して再定住に対するWRAと収容者および収容者間の意見の

齟齬、そこから生じる不信感や分断をキクチはどう捉えていたのかを日記を通して考察する。収容所内の状況がキクチ個人の再定住とどのように関わっていたのか、また、キクチはJERSの研究者として状況をどう捉えていたのかに注目する。そして、「忠誠登録」及び「出所許可申請書」が日系人収容者の再定住に及ぼした影響をキクチがどのように考えていたのかを明らかにしたい。

1. WRAの再定住政策と「忠誠登録」

軍事指定地域から強制的に立ち退かされた日系人たちは博覧会場や競馬場などを利用した急ごしらえの「仮収容所」に入れられたが、より長期間の収容のための施設が必要であった。その長期収容のための収容所を管理する機関として1942年3月18日に設立されたのがWRA（「戦時転住局」）であった。同日出された大統領行政命令第9102号によって「仮収容所」を管理していた「戦時民間人管理本部」（Wartime Civil Control Administration）の後継機関としてWRAの創設が認可された。WRA初代長官としてミルトン・アイゼンハワー（Milton Eisenhower）が就任した。WRAの設立目的は、収容所を管理することと、なるべく多くの日系人たちを軍事指定地域外に出すことであった¹¹。

戦時中の人手不足のため、労働者の派遣依頼がWRAに来るようになった。その結果1942年5月21日に季節労働のための出所が許可され、ポートランド（オレゴン州）の「仮収容所」から15人が同州東部のさとうきび畑での労働に従事した。1942年の夏の終わりには労働者の需要が高まり、約1800人の収容者がオレゴン東部、アイダホ、モンタナ、ユタに季節労働者として出所した¹²。季節労働者として出所した人たちの多くにとって、畑での重労働だけでなく、彼らに対する誤解や偏見のため不愉快な思いをすることが多々あり、収容所の外に出ることは必ずしもすばらしい経験ではなかった。マンザナー収容所（カリフォルニア州）からモンタナにさとうきびの刈り込み労働に出かけたカズオ・K・イノウエ（Kazuo K. Inouye）は次のように述べている。

我々は農家に連れていかれるので（途中で）食料品を買った。カウンターに持っていくと「すまないが、あなたたちに食料は売れない」と言われた。[中略] 我々はそこ（農場）に2か月半から3か月いた。どんなに働いても、20ドルにしかならなかった。[中略]（部屋は）非常に寒く、我々5人は一つのベッドでマットレスを上のにのせて寝ることにした。とにかくとても寒かったからだ¹³。

季節労働者の出所が始まった同じ時期の1942年5月29日、学業半ばにして強制立ち退きさせられた日系人学生たちが勉強を続けられるように手助けしようとしてカリフォルニア大学やワシントン大学の関係者及び「アメリカ・フレンズ奉仕団」（American Friends Service Committee）が「全米日系学生転住評議会」（National Japanese American Student Relocation Council、以下NJASRC）を設立した。NJASRCは、WRAと協力して

二世の学生たちを受け入れてくれる大学と交渉し、彼らを収容所の外に出す手助けをした。NJASRCは学生たちの成績や資質、財政上のことなどの資格審査を行い、これら様々な要素を考慮して上位15パーセントに入った者を1942年の秋に最初に出所させることにした¹⁴。

季節労働者の一時出所や学生の出所が少しずつ始まったことをうけて、WRAは本格的な出所規定作りに取りかかった。出所を希望する人に煩雑な手続きと厳しい出所条件を満たすことを求め、WRAは再定住という「実験」を成功させようとした。つまり、出所を許可された人たちは、受け入れ側であるアメリカ社会にとっては同じ「アメリカ人」として受け入れやすい「モデル」であり、後に出所する人たちのための受け入れの素地を作る「先駆者」であり、アメリカ社会に同化し、受け入れられた「シンボル」としての役割を期待されていた。無期出所を許可された人々の多くは大学教育を受けており、宗教的にはキリスト教徒であるか、少なくとも仏教徒や神道者ではない者で、都市部出身の二世が大半であった。こういった人々は宗教団体や教育団体の援助も受けやすく、再定住に有利であった。WRAは容易にアメリカ社会に受け入れられ、早く同化しやすそうな人々を1か所に固まらず、国中に拡散させようとした。というのも、日系コミュニティに固執することが日系人の同化を妨げ、彼らに対する偏見を強めると考えたからである¹⁵。1942年の時点では、WRAは再定住を主要な目的としてはいたが、すぐに収容所から出すことを考えていたわけではなかった。この時期、出所は漸進的に進められていった。

そうした状況下で、WRAに日系人収容者をさらに厳密に区別するのを感じさせた出来事が起こった。1942年12月に起きたマンザナー収容所での暴動がそれである。「日系市民協会(Japanese American Citizens League 以下JACL)の会員で当局の協力者と見なされたフレッド・タヤマ(Fred Tayama)が12月5日に襲われ、翌日子どもの頃日本で教育を受けてアメリカに戻ったため「帰米」と呼ばれる活動家ハリー・ウエノ(Harry Ueno)を含む3人が逮捕されたことに抗議した収容者たちと軍警察とが衝突し、死者2人を出す結果となった。WRAはこの事件を「反米的」でWRAの政策に不満をもつ者たちが起こしたと考え、アメリカ合衆国に「忠誠心を持つ」収容者とそうでない者の峻別の必要性を認識した。事件は二世の組織であったJACLが収容所内で力を握ることに起因する世代間の緊張や日系人のエスニシティを抑圧するようなアメリカ化プログラムへの不満が爆発したものであったが、WRAは収容所内の「親日派」は「トラブル・メーカー」であると解釈した。そのため、WRAは「忠誠者」とそうでない者を区別し、合衆国に「忠誠心を持つ」日系人を早く収容所から出して再定住させる必要性を認識した。実際、この事件は、1943年1月29日に実施された「忠誠登録」の一因となった。マンザナーでの暴動についてWRAは次のような見解を示している。

本当に危険だと見なされるのはほんの一握りである。[中略] 彼らを見つけ、適切な場所に入れるのが我々の意向である。[中略] 多くの人々は民主主義の原理

に忠実であり、どのコミュニティにとっても望ましい住民であると確信している。我々の希望は正常なコミュニティで新しい生活をする機会を彼らに与えることである¹⁶。

つまり、日系人を分類し、「不忠誠」な者の隔離が必要であると考えたのである。

日系人の忠誠心を示すために兵役につく機会を求めるJACLの請願を受けた陸軍省は、1943年1月に日系二世から成る戦闘部隊の編成を発表した。志願兵募集の手続きの一環として軍は二世男子を対象に「日本人を祖先に持つアメリカ市民の声明」と題する質問票を配布した。これと並行してWRAは出所許可を判断する際に必要な情報を得て、再定住政策を推進するために17歳以上の収容者全員に「戦時転住局出所許可申請書」という質問票を配布した。このアンケートはWRAの意図に反した混乱を収容所内に引き起こすこととなった。

2. キクチの日記に見る「忠誠登録」

WRAは再定住を促進するための情報を得るために調査を行ったが、多くの日系人の関心は二世部隊編成であった。特に日系人の間に議論を引き起こしたのが質問第27問と第28問であった。二世男子は第27問では命じられればどこでも実戦任務に就くかと問われ、一世の男女および二世女子は資格があれば陸軍看護部隊や陸軍補助部隊に志願するかと問われた。第28問では「アメリカへの無条件の忠誠」を誓い、日本の天皇や外国の政府、組織に対する「いかなる形でも忠誠あるいは服従を否認」するかを問われた。第27問は二世男子にとって深刻なものであった。市民権を回復できればアメリカのために戦うが、入隊に何の条件もつけることができなかったからである。また、第28問はアメリカ市民権を取れない一世の間では彼らを唯一認めてくれる政府を否定することで無国籍になるのではないかという恐れを引き起こし、二世たちにとってはこれまで誓ったこともない「天皇への忠誠」を否認するように求められていると困惑した。第28問に対する抗議の声があがると「アメリカの法律に従い、アメリカの戦争遂行のための活動をいかなる形であれ妨げる行動をとらないと誓うか」という表現に変えられた。しかし、一世の不安や不信感を和らげることはできなかった¹⁷。一世は「出所許可申請書」という書類名にも不安を感じた。WRAは収容者の情報収集を目的としていたが、一世は書類に記入するだけで出所を申請したことになり、見知らぬ土地に強制的に移住させられると思いこんでしまった¹⁸。だが、収容所内の日系人の主な関心は二世部隊編成と第27問、28問にどのように答えるかということであった。

キクチが収容されていたヒラ・リバー収容所では陸軍が二世部隊編成の発表をした1943年1月28日のその日のうちに噂が広がっていた。翌29日には収容所の新聞が号外を出し、日本語版と英語版の両方で「日系市民の志願者は今後入営を許される」と伝えた。「祖先に関係なくすべての米国市民は国難に際して武器をとる固有の権利がある」とし

て志願徴集によって部隊を作る準備を始めたことや、「米国への忠誠に関して疑いのある者は徴集されない」という陸軍長官ヘンリー・スティムソン(Henry Stimson)の言葉を掲載している¹⁹。しかし、まだこの時点では17歳以上の収容者全員を対象とする「忠誠登録」については触れられていない。

号外が出ると日系人だけの戦闘部隊編成について収容所内は賛否両論に分かれた。賛成の者は二世にとって身を立てる機会だと見なした。反対の者は人種隔離の一種と見なし、人種に関係なく対等な立場で入隊できるようにするべきだと主張した。キクチの母親や妹も「(人種隔離された) 黒人部隊のようだ。…(軍は) 以前は日系人男子をいらないといい、今は必要だけど、分離するなんて」、「二世を一纏めにするなんてひどい。彼らは散らばって他の兵士と一緒にすることができない」と日系人だけの戦闘部隊に反対だった²⁰。

収容所内では軍の発表の重要性を少しずつ認識するようになっていった。キクチは軍への志願は「忠誠」か「不忠誠」かという問題ではないと断じている。多くの二世は家族からの圧力を感じており、経済的な問題を抱えていた。家族を経済的に支えなければならぬという事情を考慮すると、志願できる二世の数は限られており大勢が軍に志願することは考えられなかった。また日系人だけの部隊編成が日系人の志願に反対する人々を勢いづかせ、収容所内に不穏な空気が漂った²¹。キクチ自身も二世部隊については「ジム・クロウ(人種隔離)」であると非難している。キクチはWRAの管理者との議論の中で、二世部隊はアメリカ人の中で「日本人」として目立つだけで、アメリカは民主主義のために戦っているのだから、二世もアメリカの一員として扱われるべきだと考えていた。戦後のアメリカ社会で日系人が受け入れられるために犠牲を払うべきであるという主張に対して、なぜ日系人だけが忠誠心を疑われ、審査されるようなことをしなければならないのか、日系人は立ち退きという犠牲をすでに払っているのではないかと述べている。二世は日系人だけの部隊に志願するよりも他のアメリカ人と同じように徴兵されることを好むはずだと主張した。二世部隊を巡る議論が収容所内で起こっており、キクチは特に高校生たちが自分たちのこととして議論をするのは良いことだと歓迎している。ただ、民主主義の原則よりもむしろ人種差別の方に焦点が当てられていることを残念だとしており、キクチがアメリカの民主主義を信じ、拠り所になっていることが見て取れる²²。

一方、WRAの干渉や検閲を受けていた収容所の新聞は日系人だけの戦闘部隊に「歓迎を表すような世間の注目」が集まっており、ハワイからの志願者からなる第100大隊は各地で好意的に受け入れられているが、他のアメリカ人と一緒にの部隊に入っていたら目立たず、このような注目は集められなかっただろうという二世部隊の編成を歓迎する記事を社説に載せた。また、日系人だけの部隊編成の結果が利益につながる時に、日系人に対するジム・クロウだという非難は馬鹿げていると軍の政策を擁護した²³。WRAとJACLのメンバーが収容所の新聞の編集者に圧力をかけ、編集者も簡単に彼らになび

いたとキクチの日記に批判的に記されている²⁴。

登録が行われる前に陸軍の係官がヒラ・リバー収容所を訪れ、質疑応答を行った。係官の1人であったノーマン・トンプソン(Norman Thompson)大尉は志願者の家族は優遇され、再定住の援助にもなるので二世は志願すべきだと主張した。キクチはこの集会で二世が志願してしまうと彼らの助けがなくなるので、年老いた一世にとって再定住は非常に困難になるのではないかと質問をすると、収容所所長のベネット(L.H. Bennet)は「再定住には勇気が必要だ。私たちが助けるから、困難を切り抜ける努力をしろ。年老いた人が外に出て新しく始められない理由がない」と述べる一方、収容所にとどまって、生活の面倒を見てもらうこともできると付け加えた。しかし、この発言はWRAの方針と矛盾しており、多くの人が再定住に対して持っている恐れや不安を考慮していないとキクチは批判している²⁵。

集会に参加した日系人たちの質問の多くは二世部隊についてであった。トンプソンは「二世の志願は国に忠誠心を持つすべての日系人のために役に立つ」と二世の忠誠心に訴える話をしたが、集会が終わると軍やWRAに懐疑的な声が日系人の間にあがった。それらの中には再定住についての意見はほとんどなかったが、翌日、キクチと他の二世との雑談の中で志願することで収容所に残していく家族を心配する者が多くいたことがわかる²⁶。

2回目の集会は前日より「冷笑的」な雰囲気満ちており、質疑応答をした二世たちは「敵対的」であった。「(日系人を) いじめてこんな扱いをした後で、どうしたら志願を期待できるんだ」、「こんな収容所に私たちを入れておきながら、なぜ志願すべきなのか」、「兵の募集に応じることは義務なのか」などの質問がなされた。また質問のほとんどは日系人だけが分離されて、戦闘部隊に入れられることについてだった。キクチは出席者のこうした態度に「二世の士気は低い」としながらも、強制立ち退きや収容などの「過去の出来事からアメリカを信じる気持ちは揺れて」おり、このような質問が出るのは「正常で当然の反応だ」としている。その一方で、彼らの態度の悪さをキクチは「恥ずかしく」思い、そうした態度を取る彼らを「ジャップ」と呼んでいる。だが、問題は「忠誠」か「不忠誠」かで人々を簡単に区別できることではなく、より複雑であるということもキクチは指摘している。また、係官の志願を促す言葉も「空虚な訴え」に聞こえ、強制立ち退きや収容で全てを奪われた人々の心に響くものではなかった。それでも多くの日系人が集会に参加しているのは軍への志願に興味があるのではなく、その後徴兵が行われるであろうことを多くの人が予測していたことを示していた²⁷。

入隊する場合に、収容所に残される家族についての質問も相次いだ。再定住に対する恐れや反対がその背後にあるとキクチは推測している。入隊している間に家族が収容所から追い出されるのではないかと心配がある一方で、人々は収容所の生活に不満を持っており、相反する気持ちを抱えていた。それほど収容所の外へ出ることへの恐れが大きく、混乱状態に陥っているとキクチは指摘している²⁸。

WRA側はこうした日系人の反応に苛立ちを見せた。軍への志願の登録が始まった2月10日にキクチはWRAのスタッフたちと雑談をした。収容所の所長ベネットは「提供されたチャンス」に対して日系人たちが「自分勝手」だと非難した。軍隊に入る恩恵を二世に与えてやっているという管理者側の考えが透けて見える。収容所内の社会福祉局局长ウィリアム・タトル(William Tuttle)は「他に選択肢はなく、原則について難癖をつけている時ではない」とし、今回の志願を成功させなければならないと二世に説いて回った。キクチやJERSの同僚の研究者であったロバート・スペンサー(Robert Spencer)はベネット所長が日系人を不忠誠だと非難するのは間違っているし、タトルは二世の心を動かすことはないだろうと考えていた。WRAの職員たちは、日系人を「忠誠」か「不忠誠」かという基準で区別する傾向にあるとここでも指摘している²⁹。

一世のために開かれた会議では、軍の二世の通訳が十分な日本語を話せず、混乱が起こった。聴衆は怒りだし、集会は不満や不安の捌け口の間となった。こうした動きに対して、軍やWRAは「一世の不忠誠者たちのデモ」とみなし、「扇動者」への対策を準備し、ますます収容者の感情を逆なでする結果となった。軍の係官は志願プログラムが失敗すれば、二世の将来が危うくなると強調した³⁰。

アメリカで生まれ日本で教育を受けた帰米の多くは質問第27問と第28問に「ノー」と答えているが、登録にやって来た二世の多くはすべてのことが「アンフェア」だと思いながらも、どうすることもできない無力感を覚えた。二世部隊への志願に関してはJACLや軍、WRAの思惑通りには進まなかった。JACLが強制立ち退きに協力したことからJACLへの不信感が日系人の間で広まっており、収容所内での影響力は限られたものだった。ある二世は、JACLは「多くの間違いを犯し、二世は信用していない。一世や帰米がどのように感じているかもわかる。(収容所では)私たちは彼らの中で暮らさなければならず、彼らの敵意をかきたてて良いことなど何もない」と述べている。忠誠登録前には収容所でJACLが軍への志願を要請したという噂が広がっていた。JACLヒラ・リバー収容所支部の集会には帰米を含む約1000人が集まり、ヒラ・リバー支部の役員たちはJACL本部の主張を広めようとしたが、特に一部の一世から反発を買っていた。彼らはJACLの役員であるノブ・カワイ(Nobu Kawai)とケン・タシロ(Ken Tashiro)が「人々を混乱に陥れた」ため「やっつける」と公言し、彼らの家には脅迫状が送られた³¹。ヒラ・リバー支部の会員ジェームズ・ナカムラ(James Nakamura)は登録の最中に発行された収容所の新聞の社説でリンカーンの誕生日にちなみ「偉大な解放」とタイトルを掲げ、強制立ち退きは民主主義の原理に反する苦々しい事だが、それをお互いに語ることが何の役に立つのかと問いかけ、不平を言うよりも軍に志願するようにと促した³²。JACLの機関紙『パシフィック・シティズン』は、二世部隊は「扇動者や人種偏見を持つ人たちに答える最も効率的な機会」として歓迎し、二世の志願は「アメリカに忠誠なすべての日系人の未来を確実なものにする」と主張した³³。しかし、二世たちは日系人だけの戦闘部隊に反対する『ロッキー日本』(1943年5月から『ロッキー新報』に改名)の英語版のジェー

ムズ・オームラ(James Omura)のコラムに共感していた。二世は軍やWRAの「巧妙さやアメリカの愛国主義のスローガンのでっちあげにあまりに影響されやすく」、短期的には二世部隊は世論に訴えるかもしれないが、長期的な視点から見れば二世は他のすべてのアメリカ人と同じ部隊に入るべきだとオームラは主張した³⁴。英語が読めない収容所の一世の中には収容所の外で発行されている日本語新聞『ロッキー日本』を購読している者もいた。日系人たちの多くは「忠誠登録」にどのように答えるのが自分たちの将来のためになるのかで迷っていた。

軍やWRAは二世の志願を促すとともに、収容所内の混乱を抑えることにも力を注がなければならなかった。非公式な会合が収容所内で開かれ、婦米が収容所内の政治力を得ようとした。こうした動きに対して、軍は「忠誠登録」へのいかなる圧力も許さず、処罰の対象とすると警告した。キクチはこの警告は収容所内の秩序を取り戻すための手段だっただろうが、集会や言論の自由を封じるものであり、また軍やWRAは「忠誠登録」を忠誠と不忠誠の問題でのみとらえ、その他の問題を忘れてるように見えると指摘している。収容所内は表面上静かになったが、家庭内では二世に「ノー」と答えるように圧力はかかり続け、婦米にとっては軍の警告はアメリカが日系人をいかに虐めているかという一例として解釈された³⁵。

忠誠登録の結果、すべての収容所から軍に志願した二世の数は1208人で、ヒラ・リバー収容所からは101人だった。質問第28問に対し、全収容所の登録対象者77957人のうち74466人が登録し³⁶、そのうち66019人が「イエス」と回答した³⁷。88.7%の人が「イエス」と答えたのはアメリカへの忠誠心も理由としてあるが、WRAや軍に1917年のスパイ活動法違反になると脅されて答えを変えたからであった。多くは軍への志願や戦時協力を積極的ではなかったが、アメリカの法律を破ったり、戦争協力を妨害したりするつもりはなく、彼らは当局が求める回答をした³⁸。その一方、「ノー」と答えた人たちが必ずしも不忠誠であったというわけではない。キクチが何度も日記に記しているように単にアメリカへの忠誠心の問題ではなかった。立ち退きの際の一世との対立やアメリカ社会から引き離されたこと、周囲の一世や婦米から「アメリカの市民権が何の役にたつのか」と言われ続けたことで二世は途方にくれた³⁹。「ノー」という答えは、一世にとってはアメリカ社会での経済的基盤を奪われたことに対して、二世にとっては市民権を侵害されたことに対する失望や怒りの表れであった⁴⁰。

しかし、WRAや軍は「忠誠登録」への回答を収容者の分類の根拠とみなし、活用した。「ノー・ノー・」と答えた人々はその後トゥールレイク隔離収容所に送られ、戦後は日系コミュニティで肩身の狭い思いをするということを予見するかのようにキクチは以下のように記している。

今後、彼らは「忠誠な」人々に与えられる特権を受け取れないだろう。戦争中、再定住の希望も機会もないまま引き離されるだろう。彼らは「不忠誠」の烙印を

押されるだろう。彼らは強制立ち退きを正当化する理由として指さされるだろう。彼らはあらゆる点で「孤児」になってしまうだろう。WRAでさえ、彼らを好意的に見ないだろう⁴¹。

3. キクチの日記に見る登録と再定住

キクチは「忠誠登録」をめぐる収容所内の当局の動きや一世、二世、帰米の言動をつぶさに観察していたが、彼自身もこの問題についてどのような態度をとるべきか迷いを見せていた。二世部隊の噂を聞いた時点で「数か月前だったらこのチャンスに飛びついていただろう。今はどうしたらいいかわからない。これが起こったら、再定住が止まるかもしれない」と記している。収容所内で自分の研究を行うのは実際的ではない一方で、収容所にいる家族をどうするのか、特に病気の父親を連れて再定住できるのか、再定住先で仕事を得る見込みはあるのかなどの悩みを記している。アメリカ精神医学会から精神医学的な助けをするソーシャル・ワーカーを軍に入れようとしているという連絡を受け、自分の専門分野を活かす機会であると考える一方で、志願をせず徴兵されるまで待つべきではないかと迷っていた。入隊すれば扶養手当をもらえるが、家族が収容所にいても手当はもらえるのか確信が持てず、そのことが再定住を遅らせることになること述べている。すぐに軍に志願することは「空虚な英雄的行為」ではないか、家族の再定住を第一にすることは不名誉なことなのかと思いつらしている。キクチは軍への志願と再定住を結びつけて自分や家族の将来をどうすべきかを考えていた。収容所での志願登録最終日にキクチは「志願したい衝動に駆られた」が、家族のことを思うとできなかつた⁴²。

前述したようにWRAは二世男子への「忠誠登録」や17歳以上の一世と二世女子への「出所許可申請書」を再定住のための情報収集として行った。JACLも再定住プログラムには積極的であった。キクチは立ち退きの際にはJACLのやり方に批判的だった。しかし、ヒラ・リバー収容所に来てからはアメリカニズムや民主主義の理念を推し進めるリベラルなグループが他に存在していなかったため、彼はJACLに関心を持ち、ヒラ・リバー支部の集會に顔を出すようになった。ヒラ・リバー支部でも収容所内で再定住をどのように進めるのかについて話し合いが行われた。JACL本部が提案する再定住の申請書の受付や斡旋をする再定住委員会の設置をヒラ・リバー支部は拒否した。収容所内でのJACLに対する不信感が大きく、JACLが再定住に関わることで逆効果になるというのが拒否の主な理由だった。ヒラ・リバー支部は、WRAが中心になって再定住プログラムを進めるべきだという姿勢をとった⁴³。

ヒラ・リバー支部は収容所内の人々の支持をあまり得られず、会員を増やすこともできずにいたが、「忠誠登録」の際には支部のリーダーたちは真っ先に軍へ志願をし、収容所内のバラックを個別訪問してアメリカへの忠誠を示すように説得をし、収容所から出征した人々の記念銘板を作るように話し合うなど日系人のアメリカ人としての意識や

アメリカ社会との一体感を高めようとした。しかし、軍への志願や再定住プログラムを押し進めるリーダーたちが従軍や再定住のため収容所を去り、軍への志願や再定住に反対する人が収容所に残ることで、そうした人々が二世に影響力を及ぼすという皮肉な結果になった⁴⁴。

キクチ自身は収容所に家族を残して従軍することはできなかったが、家族がいつまでも収容所で暮らしていて良いのかと悩んでいた。彼は世代間の対立に巻き込まれ、彼から見てあまりに「日本的な」一世や帰米に囲まれた収容所の暮らしを嫌っていた。キクチにとって収容所は「失望、権利の侵害、不適応、日本びいきの象徴」であり、逃げ出したい場所であった。収容所にいる人々も自分と同じように希望や大志や安心して暮らしたいという願望を持っていることは理解していたが、「彼らの不満に満ちた示威行動は自分の信じていることとは全く正反対」であり、そうした人々と収容所で一緒なのは苦痛であった⁴⁵。

キクチは軍への志願はしなかったが、いずれ徴兵される可能性があることを考えると、その前に家族を再定住させ、妹たちを大学に進学させたいと考えていた。キクチの妹2人は収容所の外に出ることを希望しており、母親は家族全員一緒になければ再定住しないと反対していた⁴⁶。父親の健康状態が悪く、彼を収容所に残していきたくないという母親にキクチは反論できず、どうして良いのかわからず困っていた⁴⁷。

こうした状況下で1943年2月25日にJERSの研究責任者であるトーマスからシカゴでの研究の仕事を打診する手紙がキクチのもとに届いた。手紙にはシカゴまでの交通費と月125ドルの給与が条件として記され、キクチの妹エミコにもシカゴで仕事を得る可能性があることも示唆されていた。トーマスはヒラ・リバー収容所でキクチとともにJERSの研究に携わっていたスペンサーに伝えている。

なるべく日系人たちから離れたいというチャーリーの思いを理解しているけれど、もし彼がソーシャル・ワークの仕事が続けるのなら、彼のキャリアはこのマイノリティ・グループと結びついているかのように私には思える。同時にもし私の申し出を受け入れれば、研究に大きな貢献をし、彼のキャリアアップにもつながり、彼の家族の生活も安定させることができると思う⁴⁸。

シカゴへの再定住についてキクチと母親、妹のエミコとベティの間で何度も話し合いが行われた。妹2人は外に出たいが、シカゴは既に多くの日系人が再定住しているので、より日系人の少ないミネソタ州のセント・ポールに行くことを望んでいた。また、既にキクチの姉マリコと妹アリスがシカゴに再定住しており、彼女たちの日系社会での社交生活好きの性格が妹2人に影響を与えることをキクチは危惧しており、妹たちも姉たちとシカゴで暮らすことを望んでいなかった。母親は、再定住先で日系人が襲われる記事を読んだので外は危ない、妹たちが外に出るのはまだ若すぎる、仕事が得られるかどうか

かわからない、病気の父親を置いて再定住すると彼は捨てられたと思う、英語が話せないから母親はシカゴに行けないなど様々な理由を挙げて再定住することを渋った。妹のエミコが陸軍婦人部隊(Women's Army Corps, 以下WAC)に入隊することを考えていると言うと、母親はそれには反対しなかったが、キクチは実際に入隊するとなるとまた理由をつけて反対するだろうと予想していた。「忠誠登録」の際の日系人の選択に見られたのと同様に、再定住の選択も忠誠の問題ではなく、家族離散への恐れが基準となっていることが窺い知れる。キクチは母親が心配することを理解しながらも、「あまりにも恐れているので、まだ起こってもいいことで取り越し苦労をしている」とし、説得に苦心した⁴⁹。

キクチはセント・ポールでの研究の仕事を求め、妹たちもセント・ポール行きを望んでいた。彼女たちはWRAが進める再定住した日系人が1か所に固まらず、全米に拡散するようにという政策に同意しており、それが日系人への差別や偏見を解決する方法だと考えていた。しかし、セント・ポールは研究対象地域から外れており、JERSの研究の趣旨からして再定住した日系人が多くいるシカゴが研究の対象地域であるとトーマスは考えていた。また、シカゴで研究する際に必ずしも日系人の多い地域に住む必要はないと述べ、妹たちの進学の間からも、キクチの日系人の再定住を助けるソーシャル・ワーカーの仕事の間からもシカゴが最適の場所であると指摘してシカゴ行きを勧めた。キクチはWACに入隊するか進学するかで悩んでいる妹と話し合い、シカゴ行きを決断した。行先が決まると、キクチは両親の不安を宥め、再定住の準備に取り掛かった。キクチは妹たちの面倒を見る責任やプレッシャーを感じたが、彼女たちにとって大きなチャンスであり、このように仕事を提供して助けてくれる人がいるというのはとても恵まれていると考えていた⁵⁰。

キクチや彼の妹たちは再定住を望んでいたが、収容所にいる日系人たち、特に一世や帰米の多くは再定住を望んでいなかった。1943年の時点で多くの一世は親日的な感情を持っており、交渉により戦争が終わり、自分たちの戦後の立場も日本がアメリカと交渉してくれることを期待していた。日本が戦後日系人の面倒を見ると日本のラジオが放送しているという噂をキクチも収容所内で耳にしていた。再定住に反対するあらゆる論拠にすがりつき、収容所に留まろうとしているとキクチは見ている⁵¹。

収容者たちはWRAの日系人を1か所に固まらせず、全米に拡散させる再定住の方針にも反対していた。特に収容所内で影響力を持つ仏教会の指導者が声高に反対しており、再定住に反対する最大の圧力団体となっているとキクチは指摘している。信者たちが全米に拡散して再定住した場合、宗教団体としての機能が果たせなくなることを心配しているというのがその理由であった⁵²。

また収容者は収容所の生活に慣れ、ある意味快適さや安定を見出ししていた。キクチは「多くの収容者たちが便利さ以外では外の世界を懐かしがっていない」と指摘している。1943年3月8日にヒラ・リバー収容所では二世女性の「忠誠登録」が終わり、3月10日

に一世の登録が終わると、収容所内は静かになり、人々は収容所内の政治に関心を示さないようになった。「忠誠登録」を巡る議論や集会はなくなり、人々は日常生活に戻っていった。彼らの「主な関心は夏の暑さに備えてクーラーを手にいれたり、窓にブラインドを取り付けたりすること」であった。特に一世にとって働かなくても生活や安全が保障されている収容所は「快適」であった。キクチは「彼らはこれらすべてを手放して再び『パイオニア』になりたくない。彼らは年を取り過ぎていると考えている」として、一世が再定住をしたがらないことに一定の理解を示したが、家族が離れ離れになって会えなくなることを恐れて子どもたちも再定住させたくない一世の態度を「敵意ある社会や差別をあらゆる言い訳にしているが、根本的な理由は未知のものへの恐怖である」と述べている。実際、キクチと妹たちが再定住することになると、ある一世の女性がキクチの母親に「こんな危険な時に」娘を再定住させるなんてと言いに来た。帰米は農場労働などの短期出所はしているが、英語力が十分でないため再定住の許可を取るのは難しかった。そのため、二世が再定住を先導していくことが期待されていた⁵³。しかし、キクチは二世の再定住に関しても悲観的な見方をしている。

しかし、彼らがどっちつかずの態度を取り続け、決然とした態度を取ることを拒否するならば、彼らが（再定住を先導）することはないだろう。断固たる態度をとる人たちは軍に行くことになっている。こうした二世が1人去っていくごとに、コミュニティはより日本びいきになっていき、その影響が強まる。ひどい状況である。WRAは（こうした人々を）隔離すべきであり、そうすれば再定住プログラムはこれほど妨害されないだろう⁵⁴。

キクチは再定住プログラムに反対する一世や帰米に対して批判的で、再定住プログラムを推し進めすぎると彼らが問題を起すかもしれないと考えていた。「彼らは公の場で沈黙し、自分の国を信じる者を脅すことをやめる賢さを持っていない」とし、暴力行為が起こるかもしれないことを懸念した。こうした状況下でWRAが再定住を推し進めようとしても、1943年度末までに4万人を出所させるのは難しいとキクチは考えていた⁵⁵。

収容所に快適さを感じる一方で、収容所の外に出ることに対する不安や恐怖も再定住を遅らせていた。一世は外に出たら食べ物が手に入らないことを心配していた。シカゴでの住宅不足や高い家賃の噂をキクチは収容所内で耳にしていた。また、再定住した二世が収容所に戻りたがっているという噂も収容所内で広がっていた。キクチが収容所の新聞の編集者から聞いた話では、このような噂は一世が二世の外に出ようという気持ちをくじくために広めているということだった⁵⁶。

多くの日系人が最も恐れていたのが、収容所の外の社会の差別や偏見だった。アメリカ人が食べ物に困っている時に収容所にいる日系人たちは十分な食べ物を与えられて甘やかされており、「アンクル・サムが面倒を見てくれることに感謝すべきだ。日本政府

はアメリカ人捕虜をこんなに良く扱わない」という記事が新聞にしばしば掲載された。キクチはこうした記事に対して、収容所にいる4分の3の人々はアメリカ市民であることを理解していないと憤りをあらわにした。それと同時にこうした記事が日系人たちにアメリカ社会がどのように日系人を見ているかを意識させ、安全な収容所から外の社会に出ることをためらわせるとキクチは指摘している⁵⁷。

「忠誠登録」によって収容所の日系人たちの間にさらなる亀裂や分断が生じた。「ノー」と答えた人は農場労働のための短期出所すらできなくなっていた。「ノー」と答えた人と「イエス」と答えた人が家族にいてもあり、隔離政策に遅れが生じていた。「イエス」と答えた二世が収容所を出るにつれて、一世が収容所内で政治力を持つようになった。隔離政策によって極端な親日的要素はなくなったが、一世がより収容所内の問題に関わるようになった。一世の方が二世よりもコミュニティの問題に関心を持っており、収容所内の状況を改善しようと集会に定期的に参加していたが、二世に大人としての責務を果たさせようとしないことが問題だとキクチは考えていた。また、WRAと日系人との間の仲介役をした二世の多くは軍への志願や再定住のために収容所を去ってしまい、世代間の溝も深くなった。収容所内の管理人の職はハワイ出身の既婚の二世が多く、彼らは自分たちのグループを作っていたが、他の収容者からはWRAに対して「おべっか使い」と見なされていた。収容所に残っている多くの二世は日系人があまりいない土地に「パイオニア」として再定住するつもりはなかった。このように収容所内には様々な分断や軋轢が生じていた⁵⁸。

その一方で収容所の外に出たいと思う人たちも存在していた。彼らはこうした収容所内の状況にウンザリしていた。外の社会で受け入れられるかどうか不安に思いながらも収容所の生活が嫌になり何としてでも再定住したいと考えていた。例えば、JACLの会員のハリー・ミヤケ(Harry Miyake)は収容所内の状況を改善しようとしても批判されるばかりだと不満をキクチにもらし、5人の子どもがいるため経済的不安があるにも関わらず収容所の外に出ることを考えていた⁵⁹。

キクチは再定住プログラムを進めるには収容者たちの不安を取り除くための教育活動が必要だと考えていた。特に一世の不安を取り除けば、彼らは二世が外に出るのをやめさせようとしないうらと述べている。実際、キクチが再定住の準備をしている時にある一世から「就職口を断り、安全で食べ物が豊富にある収容所に残る」ように助言をされた。さらに「病気の父親を置いていくのは良い日本人ではない」、「第一の義務は両親に対してあり、外に出ることを考えるべきではない」と言われた。一世の間ではWRAが日系人のためにすでに8千万ドル使っており、費用を心配し収容所維持のために収容者たちを追い出そうとしているという噂が広がっていた。WRAに対する一世の根深い不信感が根底にあり、正しい情報を伝えるために収容所の新聞の日本語版の拡充が必要だとキクチは考えていた⁶⁰。

キクチ自身も再定住の準備を進めていく中で収容所にいる多くの日系人と似たような

悩みを抱えていたことに気付いた。再定住先までの交通費や職や住居の確保、収容所に残る家族のことである。キクチは再定住の準備の際に2人の妹を進学させられるか、シカゴでの生活費が十分か、住居探しをするために先ずホステルで部屋を予約できるか、自分が徴兵されたら家族の生活がどうなるのか、病気の父親の面倒を見るように周囲から圧力が母親にかかるのではないかなどを心配していた。出発間際までシカゴで日系人の手助けをしているフレンド派経営のホステルから連絡がなく、荷物をどこに送ればよいのかやきもきする経験をした。キクチは収容所でJERSの研究者としてだけでなく、実際に当事者として自分が経験してみて、多くの日系人が収容所の外での生活の計画を立てることの難しさや不安を感じ、再定住をためらっているということを理解した。徴兵と再定住は足並みをそろえて進めることはできないと確信した⁶¹。

キクチは収容所生活を経て経済的な見通しが立たない不安を他の収容者と共有したが、再定住をためらう日系人にもどかしさや苛立ちを感じていた。キクチは多くの日系人と同様に再定住先での経済的な不安や自分の将来に対する不安を感じたり、家族の生活を心配したりしていたが、日系人に対する差別や偏見についてはあまり心配していなかった。多様な人種の子どもたちがいる孤児院で育った経験が影響していることが推測される。日系人だけで固まらずに収容所の外の社会で生活していくことにキクチはためらいを感じていなかった。そのため、収容所の生活に安寧を求め、強制立ち退きや収容を行った国家や社会に対する苦々しい思いから再定住に消極的な人々に対しては批判的であった。「もし本当に働いて自分のためにどうにかしたいのなら、外にはあらゆる種類の求人がある。問題は多くの二世が恐れのため思い切ってやってみようとしなないことだ」と述べ、再定住に対して「一世がためらう気持ちはまだ理解できるが、二世にとっては言い訳にならない」と厳しい。収容所に長くいればいるほどその生活に慣れてしまい、収容所の中でそれなりの楽しみを見つけているが、「どうやって自尊心を保つのか」と述べている。また、周囲に受け入れられるか心配しながらシカゴに再定住する二世女性に対して「アメリカの原理や文化のために立ちあがる勇気を持つことがあなたをアメリカ人にし、人々も受け入れてくれる」と助言した⁶²。ナイーブなまでにアメリカの民主主義や理念を信じていたことが見て取れる。

その一方で、キクチは収容者にある程度を理解を示すようになった。キクチは特に一世や帰米に対して嫌悪感を持っていたが、収容所で彼らと接することで彼らに対する理解を深めていった。子どもの頃に父親から虐待を受け、家族の中で1人だけ救世軍が経営する孤児院に入れられたキクチは、様々な人種やエスニック・グループの子どもたちの間で育ったため、一世というグループに対して複雑な思いを抱いており、「日本的」な考えに対して彼が孤児院で身に付けたアメリカの民主主義の理念に反するものとして拒否感を抱くことがあった。キクチは「日本的な」考えを持つ人々をしばしば「ジャップ」と呼んでいた。

しかし、キクチは彼らをグループとしてではなく、少しずつ個人として見るようになって

ていった。サンフランシスコ州立大学の教授はキクチへの手紙の中で彼の一世に対する変化を『「収容者もあなたや私と同じように安心を求める人間である』とあなたが記していることに私は驚いています」と指摘した。この指摘に対し、キクチ自身は日系人に対して寛容になったとは思っていないと日記に記しているが、自分の苛立ちを収容所にいる「ジャップ」に向けていることを認識していた。「彼らに非があるわけではないし、こうした（態度）が学問的に公正でないこともわかっているが、人々は常に身近にいるものをスケープゴートにする。個々人としては彼らのことを非難しないが、グループとしては非難する。この特定のマイノリティ・グループに公正なチャンスを与えない一般のアメリカ社会こそが間違っているということを時々私は忘れてしまう」として自分が彼らに偏見を持っていることや、JERSの研究者として正しい態度ではないことを自覚していた⁶³。また、一世が強制立ち退きや収容所の生活に苛立ちを持っていることも理解していた。一世や帰米も公正に扱われれば、アメリカ社会の一員として生きていくだろうと考えていた。収容所の小屋に国粹主義的なことを書き、日の丸を壁に貼っている5人の収容者たちを見て、以下のような感想をキクチは抱いている。

普段だったら、すぐに彼らを破壊活動的な日本のスパイというレッテルを貼るだろう。しかし、これらすべてはチャンスの国に対する苛立ちの表れではないだろうか。第一、彼ら4人は市民権（を得る権利）を否定されている。残りの1人は帰米である。彼らの経歴が現在の態度に表れている。…日本は彼らの空想の国である。そこでなら成功していたかもしれないと彼らは考えている。…誰が彼らを非難できるだろうか。多くの場合、もし人並みの機会が与えられれば、彼らはここに住み続けたいだろう⁶⁴。

キクチが収容所からシカゴに再定住する日に彼のもとに饞別を持ってきた一世を見て、彼らを「ジャップ」と一纏めに見なしていたことも反省している。「彼らは個々の一世であり、多くは良い人々であり、私たちと同様に恐れや理想などの感情を持っている人間なのだ」と改めて認識している⁶⁵。「忠誠登録」や再定住を通して、キクチは「日本びいき」の一世や帰米に対する嫌悪感を強めると同時に、彼らに対する理解も深めていった。

終わりに

本稿では研究者でもあり収容者でもあったキクチの日記を手がかりに、「忠誠登録」及び「出所許可申請書」の質問票が再定住に及ぼした影響を見てきた。WRAは質問票の利点として収容者に関する広範囲な経歴情報を集め、再定住の手続きの迅速化を挙げている。そして、実際に1942年に比べ再定住の動きが早まったとしている⁶⁶。しかし、質問票は収容者たちの間に分断を引き起こし、収容所の雰囲気を変化させた。そうした

収容所生活への嫌悪感を強めた二世の出所を促すことになったが、他方、WRAの再定住政策に対する不信感を増大させた。過激な「日本びいき」は隔離されたが、同時にアメリカに「忠誠な」軍への志願者も収容所を去り、収容所内の政治的な力は日系コミュニティに関心を持つ一世の手に渡った。そうした一世の下で、二世の再定住は難しくなったことがキクチの日記から読み取れる。

キクチは自身の経験から他の多くの日系人が持っていたアメリカ社会に対する恐れをほとんど持たず、WRAが奨励する日系人同士固まらずに社会に適応することが戦後の日系人にとって有益であると考えていた。ある程度文化的、生物学的同化が望ましいが、二世たちが実現できるとは考えておらず、スタート地点に立つことをキクチは望んでいた。完全な同化やアメリカ社会が均質的になることは却ってアメリカが退化することになり、日系人がアメリカ社会の多数派の人々と異なることは悪いことではないと考えていた。キクチは民主主義を強く信じており、日系人がその理念にかなう存在になることが必要だと考えていた。戦前の状態に戻ることはその実現にはつながらず、より広い社会に出る必要を強く感じていた⁶⁷。キクチにとって、再定住は日系人が積極的に他のアメリカ人と交流し、アメリカ社会に入っていくものであった。そのため、日本的な文化や価値観が支配的な戦前のような日系コミュニティを復活させることに反対し、二世の再定住の必要を主張した。安心を求めて日系人だけで固まろうとすることや、外に出ようとする人々の気持ちをくじくような行いが収容所内にあることに対し否定的であった。

その一方で、アメリカへの忠誠心に基づいて人々が「忠誠登録」に必ずしも答えているわけではないことを当初からキクチは指摘しており、質問票を用いたWRAの再定住政策を評価していなかった。「日本びいき」の一世や帰米に対して良い感情を持っておらず、彼らと共に過ごす収容所生活はキクチにとって時に苦痛であったが、個人としても研究者としても彼らに対して公正な見方をしようと努めた。研究者としての客観性を保つために、自分自身の個人的な考えをどの程度研究に反映させるべきか悩み、日記に自分の気持ちを吐露することで考えをまとめようとした。日記の中では彼らに対して非常に辛辣な時もあるが、個人として接する時には世代としてではなく、1人の人間として向き合った。彼らに対する意見は変化し、キクチ自身も日系人の将来にとってどうすることが最良なのか手さぐり状態であったことがわかる。JERSの研究が「戦後の再定住に対して何等かの貢献をすることを望んでいるが、本棚に置かれて埃をかぶる出版物になるだけではないのかと時々思う」とキクチは述べている⁶⁸。

キクチは再定住した後、同じくシカゴにやって来た日系人たちに精力的にインタビューを行い、報告書を書いた。収容所の外に出た後も家族が収容所に残っているため、再定住の問題はキクチを悩ませた。シカゴに再定住した多くの日系人たちも家族が収容所に残っており、キクチと同じような悩みを抱えていた。収容や再定住の共通体験によって、キクチは「日系人」としての意識を持ち、彼らへの理解を深めることとなった。

註

- 1 約2万1千人の日系人は「仮収容所」には入れられず、直接ポストン収容所（アリゾナ州）かマンザナー収容所（カリフォルニア州）に送られた。居住地域により立ち退きの時期、仮収容所での収容期間、仮収容所から収容所への移動時期は異なっていた。
- 2 War Relocation Authority, "Second Quarterly Report, July 1 to September 30 1942," in *Quarterly and Semi-Annual Reports* [『日系人強制収容白書』] vol. 1, 日本図書センター、1991年、13; 上杉忍『二次大戦下の「アメリカ民主主義」－総力戦の中の自由』講談社選書メチエ、2000年、186-189頁。
- 3 War Relocation Authority, *The Evacuated People: A Quantitative Description* (Washington D.C.: The U.S. Government Printing Office, 1946; reprint, New York: AMS Press), 30.
- 4 ミチコ・ウェグリン（山岡清二訳）『アメリカ強制収容所－屈辱に耐えた日系人』政治広報センター、1974年、172頁 (Michi Weglyn, *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps* [New York: Morrow Quill PaperBacks, 1976], 139-140)。日本語表記はミチコ・ウェグリンとなっているが、英語表記は Michi Weglyn である。
- 5 Dorothy S. Thomas and Richard Nishimoto, *The Spoilage: Japanese American Evacuation and Resettlement* (Berkeley: University of California Press, 1946), 333-363.
- 6 村川庸子『境界線上の市民権－日米戦争と日系アメリカ人』御茶ノ水書房、2007年、12-14頁；Brian Masaru Hayashi, *Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment* (Princeton: Princeton University Press, 2004), 145-146.
- 7 チャールズ・キクチの第二次世界大戦中から戦後までの足跡および人種関係についての考えについては Matthew M. Briones, *Jim and Jap Crow: A Cultural History of 1940s Interracial America* (Princeton: Princeton University Press, 2012) を参照。また、キクチの半生は作家のルイス・アダミック (Louis Adamic) によって伝記的小説として著されている。ルイス・アダミック（田原正三訳）『日本人の顔をした若いアメリカ人』PMC出版、1990年。
- 8 キクチが1943年4月から1944年にかけてシカゴに再定住した64人の日系人に行ったインタビューをもとに15人のライフ・ヒストリーを取めた研究書 *The Salvage* がドロシー・トーマスの名前で JERS の成果として出版されている。Dorothy S. Thomas, *The Salvage: Japanese American Evacuation and Resettlement* (Berkeley: University of California Press, 1952)。
- 9 Charles Kikuchi, *The Kikuchi Diary: Chronicle from an American Concentration Camp*, ed. John Modell (1973; reprint, Urbana: University of Illinois Press, 1993)。

- 10 Charles Kikuchi, "Through the JERS Looking Glass: A Personal View from Within," in *Views from Within: The Japanese American Evacuation and Resettlement Study*. ed. Yuji Ichioka (Los Angeles: Asian American Studies Center, University of California at Los Angeles, 1989), 188.
- 11 U.S. Department of the Interior, *Administrative Highlights of the WRA Program* (Washington D. C.: The Government Printing Office, 1946), 1.
- 12 War Relocation Authority, *WRA: A Story of Human Conservation* (Washington D.C.: The U.S. Government Printing Office, 1946; reprint, New York: AMS Press, 1975), 32; War Relocation Authority, "First Quarterly Report, March 18 to June 30 1942," in *Quarterly and Semi-Annual Reports*, 18.
- 13 *Regenerations Oral History Project*, Los Angeles Region, vol. II. (Los Angeles: Japanese American National Museum, 2000), 182.
- 14 Robert O'Brien, *The College Nisei* (Palo Alto: Pacific Books, 1949), 62-64; Gary Okihiro, *Stored Lives: Japanese American Students and World War II* (Seattle: University of Washington Press, 1999), 38.
- 15 Thomas, *Salvage*, 125; Richard Drinnon, *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism* (Berkeley: University of California Press, 1987), 58.
- 16 "What Happened at Manzanar," *Common Ground* 3 (Spring 1943), 86.
- 17 飯野正子 『もう一つの日米関係史－紛争と協調のなかの日系アメリカ人』 有斐閣、2000年、112-113頁；ウエグリン 『アメリカ強制収容所』、167-169頁。
- 18 エリック・L・ミューラー（飯野正子監訳）『祖国のために死ぬ自由－徴兵拒否の日系アメリカ人たち』 刀水書房、2004年、70頁。
- 19 "Nisei Eligible for Army War Department Release," *Gila News-Courier*, February 29, 1943. 同新聞の日本語版でも二世部隊編成の記事が掲載された。「日系市民の志願者は今後入営を許される」『比良時報』1943年1月29日。
- 20 Charles Kikuchi, "Diary," January 29, 1943, 1899, Japanese American Evacuation and Resettlement Studies: A Digital Archive, Bancroft Library, University of California, Berkeley, (以下JAERDA) accessed September 4, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk001333n98/?brand=oac4>. チャールズ・キクチの日記はカリフォルニア大学ロサンゼルス校のチャールズ・ヤング図書館のスペシャル・コレクション Charles Kikuchi Papers, Box 15 and 16, Collection 1259, Department of Special Collections, Charles E. Young Research Library, UCLAおよびカリフォルニア大学バークレー校のバンクロフト図書館のJERS Records, folder W 1.80, BANC MSS 67/14c, Bancroft Library, University of California, Berkeleyに所蔵されているが、この論文ではカリフォルニア大学バークレー校がJERS Recordsをデジタル化したものを主に使った。以下、Kikuchi, "Diary"とし、引用箇所の月日、年、ページで示す。

- 21 Kikuchi, "Diary," January 31, 1943, 1912-1913.
- 22 Ibid., February 4, 1943, 1943-1944, JAERDA, Accessed August 3, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk001334c82/?brand=oac4>. 1943年の日記は月ごとにURLが異なる。
- 23 "Editorial: Spotlight Warmer," *Gila News-Courier*, February 4, 1943, 2.
- 24 Kikuchi, "Diary," February 4, 1943, 1945.
- 25 Ibid., February 7, 1943, 1972.
- 26 Ibid., February 7, 1943, 1973; February 9, 1943, 1978.
- 27 Ibid., February 9, 1943, 1982-1984.
- 28 Ibid., February 9, 1943, 1984-1985.
- 29 Ibid., February 10, 1943, 2006.
- 30 Ibid., February 11, 1943, 2007-2010.
- 31 Charles Kikuchi, "Development of Gila JACL," 52-53, Japanese American Evacuation and Resettlement Studies: A Digital Archive, Bancroft Library, University of California, Berkeley, JAERDA, accessed August 3, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk0013c925r/?brand=oac4>.
- 32 "Editorial: Great Emancipations," *Gila News-Courier*, February 11, 1943, 2.
- 33 "On Military Service," *Pacific Citizen*, February 4, 1943, 4.
- 34 James Omura, "Nisei Life," *Rocky Nippon*, February 3, 1943, 4.
- 35 Kikuchi, "Diary," February 13, 1943, 2022-2027, 2030.
- 36 登録を拒否したり、できなかったりした人がいたため、登録対象者の数と実際に登録した人の数に違いが出た。War Relocation Authority, "Semi-Annual Report, January 1 to June 30, 1943," in *Quarterly and Semi-Annual Reports*, 13.
- 37 Ibid., 10, 13.
- 38 Hayashi, *Democratizing the Enemy*, 143-147.
- 39 Kikuchi, "Diary," February 25, 1943, 2123-2124.
- 40 Thomas and Nishimoto, *The Spoilage*, 61-63.
- 41 Kikuchi, "Diary," February 25, 1943, 2121.
- 42 Ibid., January 28, 1943, 1888-1889; January 29, 1943, 1900-1901.
- 43 Kikuchi, "Development of Gila JACL," 7, 40.
- 44 Ibid., 87-90.
- 45 Kikuchi, "Diary," February 16, 1943, 2048.
- 46 キクチの姉マリコは強制立ち退き前に1人で「軍事指定地域」から「自由立ち退き」をしており、キクチのすぐ下の妹アリスは1943年1月に収容所を出て、シカゴでマリコと一緒に暮らしていた。キクチの弟ジャックはキクチの勧めでニュージャージー州のドルー大学に入学した。1943年2月の時点でヒラ・リバー収容所にはキク

- チと両親、妹のエミコ、ベティ、ミヤコ、弟のトムの7人が収容されており、父親は収容所内の病院に入院していた。Briones, *Jim and Jap Crow*, 54, 170; Kikuchi, "Diary," January 27, 1943, 1885.
- 47 Kikuchi, "Diary," February 15, 1943, 2045.
- 48 Ibid., February 25, 1943, 2128-2129.
- 49 Ibid., February 26, 1943, 2145; March 1, 1943, 2165-2166, JAERDA, Accessed August 4, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk00133575t/?brand=oac4>. このURLは3月の日記のものである。
- 50 Ibid., March 6, 1943, 2197-2198; March 10, 1943, 2237-2240.
- 51 Hayashi, *Democratizing the Enemy*, 171-172; Kikuchi, "Diary," March 2, 1943, 2173.
- 52 Kikuchi, "Diary," March 2, 1943, 2173.
- 53 Ibid., March 15, 1943, 2262-2263; March 20, 1943, 2322.
- 54 Ibid., March 15, 1943, 2264.
- 55 Ibid., March 15, 1943, 2262-2264; March 16, 1943, 2292; March 20, 1943, 2322. 実際は1943年12月の時点での季節労働のための出所を除いた出所者数は17844人であった。War Relocation Authority, *The Evacuated People*, 30.
- 56 Kikuchi, "Diary," March 18, 1943, 2307; March 24, 1943, 2372.
- 57 Ibid., April 8, 1943, 2496, JAERDA, accessed August 3, 2021, <https://oac.cdlib.org/ark:/28722/bk001336825/?brand=oac4>.
- 58 Ibid., March 30, 1943, 2435-2437.
- 59 Ibid., April 2, 1943, 2452.
- 60 Ibid., April 5, 1943, 2471-2473.
- 61 Ibid., March 16, 1943, 2281; April 2, 1943, 2450-2451, April 6, 1943, 2477.
- 62 Ibid., April 11, 1943, 2507; April 5, 1943, 2469.
- 63 Ibid., March 29, 1943, 2404-2405.
- 64 Ibid., February 1, 1943, 1934-1936.
- 65 Ibid., April 12, 1943, 2515.
- 66 War Relocation Authority, "Semi-Annual Report, January 1 to June 30, 1943," in *Quarterly and Semi-Annual Reports*, 1, 10.
- 67 Kikuchi, "Diary," March 22, 1943, 2341.
- 68 Ibid., March 22, 1943, 2340.

増田直子（文学部非常勤講師）

執筆日 2022年2月27日

推薦者 中野由美子（文学部国際文化学科教授）